

令和3年度 沖縄県学力到達度調査の結果

沖縄県教育庁義務教育課

1 趣 旨

- (1) 本県児童生徒一人一人の当該学年までの学習の定着状況を把握し、各学校における授業改善の充実を図るために実施する。
- (2) 各学年の教科分析を通して、年度末において自校の落ち込みのある領域を把握し、習得状況を揃える取組に生かす。

2 実施期間・対象学年・教科

実施時期 令和4年2月15日(火)～3月11日(金)

対象学年	教科	対象学年	教科
第5学年	国語、算数	第1学年	国語、数学、英語
第6学年	国語、算数	第2学年	国語、数学、英語

3 教科の調査結果 (3/18時点)

(1) 小学校

対象学年	教科	受験した児童数(人)	正答率(%)	誤答率(%)	無解答率(%)	正答率30%未満の児童の割合%(昨年度値)
第5学年	国語	14,671	67.9	23.9	8.2	7.7 (9.7)
	算数	14,857	52.5	39.6	7.9	22.6 (24.4)
第6学年	国語	14,672	61.8	31.5	6.7	8.0 (4.0)
	算数	14,664	38.6	51.0	10.4	44.4 (8.5)

(2) 中学校

対象学年	教科	受験した生徒数(人)	正答率(%)	誤答率(%)	無解答率(%)	正答率30%未満の生徒の割合%(昨年度値)
第1学年	国語	14,056	52.5	38.7	8.8	13.2 (10.2)
	数学	13,971	43.3	46.4	10.3	34.5 (18.9)
	英語	13,973	41.3	51.5	7.2	32.8 (24.0)
第2学年	国語	13,586	55.3	38.0	6.7	6.7 (8.4)
	数学	13,563	39.9	45.3	14.4	37.5 (29.2)
	英語	13,567	54.4	42.4	3.2	16.7 (18.8)

4 結果の概要

(1) 小学校

第5学年・第6学年ともに国語の正答率が高く、算数の正答率が国語を大きく下回った。算数の問題の難易度が高かったとも言えるが、正答率30%未満の児童の多さが正答率を押し下げたことが要因の1つとして挙げられる。

(2) 中学校

第1学年・第2学年とも国語の正答率が一番高かった。また、第1学年の数学と英語、第2学年の数学の正答率が50%を下回った。小学校と同じく、難易度が高かったとも言えるが、正答率30%未満の生徒が多いことが要因の1つと考えられる。さらに、数学に関しては、誤答率、無解答率も他教科より高く、課題がある。

5 各学年・各教科の状況

(1) 小5〈国語〉

第5学年国語の設問数は17題。調査実施の結果、中央値が12で標準偏差が3.7であった。

正答率80%以上の児童は34.7%、正答率30%未満の児童は7.7%であった。正答率80%以上の設問が5題、正答率30%以下の設問が1題あった。自分が考えたことを文章に表すような問題で誤答率及び無答率が高くなる傾向が見られた。

(2) 小5〈算数〉

第5学年算数の設問数は17題。調査の結果、中央値が9で標準偏差が4.1であった。

正答率80%以上の児童は15.3%、正答率30%未満の児童は22.6%であった。正答率が80%以上の設問が1題、正答率30%以下の設問が1題あった。小学校調査科目で、標準偏差の値が最も大きかった。割合を比較するという目的に適したグラフを選ぶことができるかをみる設問で最も誤答率が高く、理由の説明など自分の考えを書くような設問で無答率が高くなる傾向が見られた。

(3) 小6〈国語〉

第6学年国語の設問数は16題。調査の結果、中央値が10で標準偏差が3.4であった。

正答率80%以上の児童は24.4%、正答率30%未満の児童は8%であった。正答率が80%以上の設問が4題、正答率30%未満の設問はなかった。言葉の特徴や使い方に関する事項に関する設問で誤答率が高く、自分が考えたことを文章に表すような設問で無答率が高くなる傾向が見られた。

(4) 小6〈算数〉

第6学年算数の設問数は17題。調査の結果、中央値が6で標準偏差が3.7であった。

正答率80%以上の児童は5.3%、正答率30%未満の児童は44.4%であった。正答率が80%以上の設問が1題、正答率が30%以下の設問が8題あった。柱体の展開図について理解し、図形を構成する要素に着目し辺の長さを求めることができるかどうかをみる設問で最も誤答率が高く、自分の考えを数学的に表現するような設問で無答率が高くなる傾向が見られた。

(5) 中1〈国語〉

第1学年国語の設問数は15題。調査の結果、中央値が8で標準偏差が3であった。

正答率80%以上の生徒は12.2%、正答率30%未満の生徒は13.2%であった。正答率が80%以上の設問が1題、正答率が30%以下の設問が3題あった。中学校実施調査科目で、中2国語とともに標準偏差の値が最も小さかった。小学校で学習した漢字を正しく読むことができるかをみる設問で最も誤答率が高く、自分の考えが伝わるように工夫して書くような設問で無解答率が高くなる傾向が見られた。

(6) 中1〈数学〉

第1学年数学の設問数は16題。調査の結果、中央値が7で標準偏差が4.3であった。

正答率80%以上の生徒は12.8%、正答率30%未満の生徒が34.5%であった。正答率80%以上の設問はなく、正答率30%以下の設問が1題あった。多項式どうしの減法の計算ができるかをみる設問で最も誤答率が高く、目的に応じて数学的に説明するような設問で無解答率が高くなる傾向が見られた。

(7) 中1 (英語)

第1学年英語の設問数は35題。調査の結果、中央値が13で標準偏差が6.8であった。

正答率80%以上の生徒が4.9%であった。正答率30%未満の生徒は32.8%、正答率80%以上の設問が1題、正答率30%以下の設問が8題あった。文脈に応じて適切な語句を選択し、正しい文法事項(現在進行形)を用いて正確に書くことができるかをみる設問で最も誤答率が高く、自分の大切なものについて、簡単な文や語句を用いて表現する設問で、無解答率が最も高かった。

(8) 中2 (国語)

第2学年国語の設問数は15題。調査の結果、中央値が8で標準偏差が3であった。

正答率80%以上の生徒は15.5%、正答率30%未満の生徒は6.7%であった。正答率80%以上の設問が2題、正答率30%以下の設問はなかった。中1国語とともに標準偏差の値が最も小さかった。目的に応じて必要な情報に着目することができるかどうかをみる設問で最も誤答率が高く、自分の考えが伝わるように工夫して書く設問で無解答率が高くなる傾向が見られた。

(9) 中2 (数学)

第2学年数学の設問数は16題。調査の結果、中央値が6で標準偏差が4であった。

正答率80%以上の生徒は8.3%、正答率30%未満の生徒は37.5%であった。正答率80%以上の設問はなく、正答率30%以下の設問が6題あった。一次関数のグラフが通る2点の座標の差について、その差が表す数量の意味について理解しているかどうかをみる設問で最も誤答率が高く、目的に応じて数学的に説明するような設問で無解答率が高くなる傾向が見られた。

(10) 中2 (英語)

第2学年英語の設問数は36題。調査の結果、中央値が19で標準偏差が8.4であった。

正答率80%以上の生徒は17.8%、正答率30%未満の生徒は16.7%であった。正答率80%以上の設問が3題、正答率30%以下の設問が5題あった。中学校調査科目で、標準偏差の値が最も大きかった。〈teach+人+もの〉を活用した文構造がわかるかをみる設問で最も誤答率が高く、与えられた条件に従って、自分の意見や理由を英語で述べる設問で無解答率が高くなる傾向が見られた。

6 教科共通の課題

◆各教科における「記述式問題」から見える課題

小学校 国語

○物語文を読んで、分かったことを書く。小5 3 六 正答率 27.7%

○考えが明確に伝わるように工夫して発表の文を書く。小6 1 三 正答率 41.3%

小学校 算数

○単位量当たりの大きさの意味について理解し説明を書く。小5 7 正答率 34.6%

○数量関係について理解し、考察・解決し表現する。小6 5 (3) ② 正答率 11.9%

中学校 国語

○条件に合わせて自分の考えを述べる。中1 3 (2) 正答率 23.2%

○自分の考えが伝わるように工夫して書く。中2 2 (3) 正答率 31.4%

中学校 数学

○事柄が成り立つ理由を筋道立てて説明する。中1 7 (2) 正答率 32.9%

○図形の成り立つ条件について理解し、証明する。中2 9 (2) 正答率 10.8%

中学校 英語

○まとまりのある英文を聞いて質問に適切に応答する。中1 3 (3) 正答率 6.3%

○条件に従って、自分の意見や理由を英語で述べる。中2 11 正答率 60.2%

◆各教科で共通する課題

○目的や「問い」を自分で明らかにして、条件に合うよう考え表現する力

- ・条件を提示されて解いてはいるが、「条件に合っているか」の確認や、「誰に伝えるのか」「何のために伝えるのか」など、学習の対象や文脈から目的を自分なりに捉え、解決に導くことに課題が見られる。

○課題が何かを明らかにし、解決を見通したり、振り返ったりしながら全体を捉える力

- ・段落やまとまりなどで捉えることはできるが、全体を俯瞰して捉えて表現したり、自己を振り返ったりしながら解決に導くことに課題が見られる。

○課題を解決するための知識・技能

- ・設問によっては、課題解決するために必要な知識・技能の習得が不十分な部分も見られる。

7 共通実践事項

各教科の記述式の設問で、誤答率や無解答率の値が大きくなる傾向がある。その傾向を改善するために下記(1)～(6)に留意した授業改善を図る必要がある。

- (1) 単元計画等に、具体的な事象や体験活動を積極的に取り入れ、児童生徒が学んだことの意義や価値を実感できる学習活動を日常化する。
- (2) 各教科で正答率 30%未満の児童生徒の学習状況を客観的に分析し、フィードバックを行う。
- (3) 各学校の正答率の低い設問は、年間指導計画に位置づけ、学力向上年間サイクルの充実を図る。
- (4) 各学校において、教科における共通する課題について分析し、「自分なりに考えること」「条件に沿って書くこと」「目的に応じて書くこと」など、全教科において組織的な授業改善を推進する。
- (5) 各教科の正答率の低い設問を分析し、定着が不十分な知識・技能の習熟を図る。
- (6) 指導と評価の一体化の観点から、児童生徒の学習状況をしっかり見取り、フィードバックして学習改善・授業改善に生かす。

各学校においては、新学習指導要領の目指す資質・能力の育成を、組織的・日常的な授業改善を通して推進し、児童生徒一人一人に合わせた効果的な支援を行う。

教師は、学びの連続性を意識し、児童生徒が学んだことを次の学習や家庭学習など様々な場面で活用したり、課題解決のために構想を立て実践し、自己の学びを振り返ったり改善していくような学びの充実を図るよう、日常的な授業改善を推進する。

◆各教科の授業改善に向けて

子供たちが、課題解決へ向けて、自分なりに「問い」を立て考えるようにする。

子供たちが、他者や教材と関わりながら、学習の対象を捉え、課題解決へ向かうようにする。

子供たちが、学んだ事を他教科も含め様々な場面で活用し、確実に習得できるようにする。